

# 「知れる」の多用の現状と学生の語感の変化

## －日本語表現科目学修成果欄の記述を起点とした文章指導－

小椋 愛子  
OGURA Aiko

### 1. はじめに

本学で 2010 年度から日本語表現科目の授業を担当している。現在担当している「日本語表現1」と「日本語表現2」は回によって提出課題があり、提出用紙には本時の授業で得た気づきや課題を行う際に留意したことなどを記す「学修成果欄」が設けてある。この「学修成果欄」の記述に近年、「知れる」という表現が非常に多くなった。特に、「日本語表現1」の科目は当初から担当しているが、当時は「知る」の可能表現は「知ることができる」が多く、可能動詞としての「知れる」の使用は少数であった。

筆者は、この可能動詞「知れる」に対して違和感がある。ただし、これは文法的というより語感に関わる問題であろう。このような語感に関する問題をどのように取り上げ、指導の対象とするのか。本稿では、学生の「知れる」に対する語感の把握と、その指導方法を考察・報告する。その上で「学修成果欄」を用いた指導法、活用方法の拡充を提案する。

### 2. 学修成果欄に見られる「知れる」について

#### 2.1 学修成果欄とその記述方法

「学修成果欄」（以下、「成果欄」）について説明する。ここで扱う「成果欄」は、「日本語表現1」、「同2」の提出用紙に設けられているものを指す。「日本語表現1」の課題は、学術的文章に必要な項目の習熟度を確認する文章修正問題と小論文課題とから成る。前者の「成果欄」の指示は、「本時の学修成果で得た気づきと、その成果を上記課題にどう生かしたかを具体的に詳述せよ」、後者は「本時の学修成果と、それに基づく自分の文章の修正箇所および具体的な修正方法」である。「日本語表現2」では、資料を収集するための課題と授業で学修した内容を確認する課題とがある。前者の指示は、「本時の学修および上記課題を通して気づいたことを具体的に記述せよ」で、後者は、「本時の学修で得た気づきと、その成果を上記課題にどう生かしたかを具体的に記述せよ」である。記述欄のスペースはすべて5行である。

指示の表現に違いはあるが、いずれも授業の成果を具体化させ、学修内容を整理させる役割を持つ。

この「成果欄」の記述に際して筆者は授業の感想（印

象的だったこと)を先に記すよう伝えている。さらに「書き言葉」で記すのが好ましいが、学術的文章にこだわらず自由な表現でよいと指示している。これは学術的な表現を重視するあまりに、細かなニュアンスを表現しにくくなるのを危惧してのことである。特に「日本語表現1」の前半は、学術的文章を書くための項目を学修するため、内容よりも学術的な「語」の使用に拘泥する傾向がある。課題では辞書の使用を認めているため、馴染んでいない「語」の場合、本来のニュアンスを損なうこともある。そのため、「成果欄」では、表現よりも内容を重視している。

#### 2.2 「学修成果欄」の「知れる」の表現

内容を重視する「成果欄」であるが、この記述に「知れる」、特に「知れてよかった」の形がよく見られるのである。たとえば、「和語より漢語を用いることが知れてよかった」、「引用のルールが知れてうれしく思う」、「今まで曖昧であった〇〇の使い方を知れたので、今回知れたことを使えるようにしていきたい」などである。活用形では連用形が多い。過去形でも使用するが全て「可能」の意味で、可能動詞として使用しているといえよう。学生に「知れる」を使用する意図を確かめたところ、「知れる」は「理解した」、「わかる」の意ではなく、単に知識などを「情報」として「得た」、「知った」だけという意味で、「理解」まではしていない、「わかる」前（定着する以前）の状態のようである。

先述したように、筆者はこの「知れる」の用法に違和感がある。「知る」を可能の意味にする場合、無意識に「知ることができる」を用い、場合によっては他の語に置きかえるためである。しかし、「成果欄」に可能動詞としての使用例が複数認められることから、学生らはこの可能表現に違和感を持たないことが窺える。それでは、この「知れる」は、どのように扱うべきであろうか。次章で考察する。

### 3. 「知れる」の考察

#### 3.1 「知れる」の文法上の扱い

ここで、「知れる」の意味を確認する。『日本国語大辞

典』(以下、『日国大』)には、次のようにある(註1)。

し・れる【知】〔自ラ下一〕 因し・る〔自ラ下二〕

(1) (「知る」に対する受身・使役形で、「他人の知るところとなる」の意を、消極的には受身として、積極的には使役として表現したもの) 知られる。また、知らせる。わからせる。(続けて用例を「万葉集」以下、他2書から挙げるが省略する。)

(2) (「知る」に対する自発・可能形) 知ることができる。自然にわかる。\*虎明本狂言・犬山伏(室町末～近世初)「一どにてはしれぬ、まどあひひのりにいのらふ」(以下、用例が7例続くが省略する。)

この「知れる」は自動詞であるが、上記の(2)に「知る」に対する可能形として「知ることができる」とある。用例は「自発形」と合わせての列挙だが、なかでも「虎明本狂言」の例は可能の意が強い。用例の上限から(2)は(1)より新しい用法と言えるが、可能の意があることが理解される。ただし、『日国大』がこの「可能形」を「可能動詞」として扱っているかは不明。『日国大』は「可能動詞」形をすべて立項しているわけではないが、「笑える」「読める」などは「○○」の可能動詞と明記している。「可能動詞」は、『日国大』に「五段(四段)活用の動詞が下二段活用に転じて可能の意味を持つようになったもの。「読める」「書ける」「言える」などの類で、中世末期頃からみられる」とあるから、「知る」の可能動詞として「知れる」があるのは論理的には妥当といえる。

以上のように、「知れる」の可能形は自動詞の意味としてもあり、また「可能動詞」としても文法的には誤りではないといえよう。

### 3.2 可能動詞「知れる」に対する違和感

それでは、可能動詞「知れる」に対する違和感は筆者のみであろうか。試みにインターネットの検索エンジン「YAHOO!Japan」(2023)で「知れる・違和感」を検索すると、それに関するものが「約192,000件」あることがわかる。検索結果から、「知れる」は一定数が違和感を覚える表現であること、2011年前後から記事が増加していることが確認できる。

この検索結果から次の3つ(私に番号を付す)＝①塩田(2012)「最近気になる放送用語「知れて」?「知ることができて」?」②神永(2017)「「知れる」は「知ることができる」という意味か?」③毎日新聞校閲センター(2018)「「知る」の可能形「知れる」もあり?」の記事に着目する。これらの記事は、全て可能表現「知れる」を問題とし、なかでも①と③はアンケート結果を提示している。これは当時のものであるが、次節(3.3)で「学生」に実施したアンケート結果と比較する。

まずは①から③の内容を見ていく。①塩田(2012)は、「事実を知れてよかった」という言い方に対する質問の

回答で、「知る」という動詞が個人の意思では制御できない動作を表す動詞であることから、形の上では可能動詞を作ることができるが「自発」の意味になることがあること、「知れる」も同様で本来は「自発」として使用されること、「知れる」が「可能」として使われるのは最近のことであるとして、アンケート結果(グラフ)を提示する。さらに「可能」の意味での使用は若い年代ほど多くなることを指摘し、これから一般的な表現になるかと推測している。②神永(2017)は、五段活用の動詞は下二段活用に転じる場合、全てが「可能」の意味になるのではなく、「自発」の意味で使われる方が多い語もあり、「知れる」も従来はそうした語の1つであったと説明する。そして、これは「自発」の意味で使われていたものが、「可能」の意味でも使われるようになった、新しい言い方であると結論づける。③毎日新聞校閲センター(2018)は、「これを読めば真相を『知ることが可能』の「二重カギ」の中に入る語を4つの中から選択するアンケート(対象人数は不明)結果を挙げる。選択肢は、「知れる」「知られる」「知りうる」「知ることができる」の4択で、なかでも「知ることができる」が3分の2を超え、「知りうる」が4分の1程度であったとする。さらに「知れる」は5%弱だったことから、「知れる」を使いたくないが「知ることができる」は長いと感じる人が、「知りうる」を選択したと推測している。その上で「知れる」は「知る」を可能動詞にしたものだが、「広く受け入れられている」とは言い難いと結論づける。さらに、①のアンケート結果を引用し、可能の意味の「知れる」が増加してきたのは、それを当然と感じる世代が、「情報を発信する側に回ってきたため」と推測している。

これらの記事からも、可能動詞の「知れる」は文法としては成り立つが、本来は「自発」の意が強かった語の新しい使用法と認識されていることが窺える。

ここで①塩田(2012)のアンケートについて補足する。①のアンケート(回答者385人)は、「事実を『○○』よかった」の○○について、「「知ることができて」と言う(「知れて」とは言わない)」、「両方とも言う」、「知れて」と言う(「知ることができて」とは言わない)」の中から選択した割合を年代別(10代から60代以上)にグラフで表したものである。グラフでは32、33歳以上から徐々に、「「知ることができて」と言う」が「両方とも言う」を上回りその差が大きくなる。そのため、その年代以上では一定数が「知れる」に対して違和感を持つといえる。ただし、20代では「両方とも言う」が「「知ることができて」と言う」の2倍になるため、今後は違和感を持つ人が減少していくことが推察された。

### 3.3 学生の「知れる」に対する語感・イメージ

ここで、学生が持つ、可能動詞「知れる」のイメージ

を確認する。参考として筆者が担当する3クラス（回答者64人・1年生中心）でアンケートを実施した<sup>(注2)</sup>。アンケートは、上記①、③と比較するため類似の設問（一部改変、質問の表現や選択肢の記号化なども含む）を挙げ、その後に独自のものを加えた。設問は大きく5つ。

まず、「1」として③毎日新聞校閲センター（2018）の設問、「これを読めば真相を『知ることが可能』」の「二重カギ」の中に入る語を「ア、知れる」「イ、知られる」「ウ、知りうる」「エ、知ることができる」から選択する問いでは、62.5%が「エ、知ることができる」を選択し、31.3%が「ア、知れる」を選択した。③の結果では「知ることができる」に次いで「知りうる」が「4分の1」程度であるが、今回「知りうる」を選択したのは1人のみであった。続いてこの4択の中で違和感のないものを全て挙げるよう（複数回答可）尋ねたところ、「エ、知ることができる」が90%、「ア、知れる」が60%と突出し、他の二つはそれぞれ10%強であった。③と比較すると、本学生の結果も「知ることができる」が最も多いものの、「知れる」が増加したため、両者の差が小さくなっていることが窺える。また、「知りうる」の語に馴染みがないことも理解された。

続けて「2」として、①塩田（2012）の設問をふまえて「事実を『〇〇』よかった」の〇〇に入る語に、「ア、知ることができて」「イ、知れて」のうち、「最もよく使う語」（両方使う場合は頻度の高い方）を尋ねたところ、「ア」（知ることができて）が32.8%、「イ」（知れる）が67.2%と「イ」が2倍以上多くなった。さらに、どのように使い分けるかを記述式で尋ねたところ、回答中、66%が話し言葉としては「イ」、書く（特にレポート）ときには「ア」と回答した。また、（書く場合でも）「SNSのチャット文」や「LINE」では短い方がよいため、「イ」を使用するとの回答があった。次いで「話す」場合でも、「目上や知らない人」、「アルバイト関係の人」では「ア」を、「家族や親しい友人」とは「イ」を使うとの回答が22%あり、話し言葉としても「ア」と「イ」を使い分けている傾向が見られた。これは、自分との関わりの度合いで「語」を使い分けているといえ、興味深い。これに加えて、「かしこまった」、「フォーマル」な場では「ア」、「くだけた」、「カジュアル」な場では「イ」と、場によって使い分けているとの回答もあった。これに関連し、（不特定多数の前で行う）「スピーチ」や「発表」では「ア」を用いるとの回答も見られた。一方、「特に意識していない」「適当」との回答も6%あった。

さらに、「3」として、上記「2」の設問の例文、「事実を『〇〇』よかった」の「事実を」を「事実が」と、格助詞に変えて、〇〇に入る語を同様に「ア、知ることができて」「イ、知れて」の選択で尋ねたところ、「イ」が95.4%、「ア」が4.6%となった。可能動詞の前には

格助詞が多いことを考えると妥当な結果であろうか。これに続けて、その語を選択した理由を記述式で尋ねたところ、「ア」は、「が」が2回続くことに違和感がある、「～が～が」となり、意味がわかりにくいなどの回答が見られた。それに対し、「イ」は、「自然で違和感がない」、「言いやすい」という回答が目立った。その一方で、「イ」はら抜き言葉でくだけた表現との回答や「くだけた表現」をよく注意されるため、使わないようにしているなどの回答もあった。これは、可能動詞と「ら抜き言葉」との混同の例といえよう。

「4」の設問では、「成果欄」によくある文章、「A.引用の方法を知れてよかった」「B.引用の方法を知ることができてよかった」を例にして、使用する頻度を尋ねたところ、「A」が46.9%、「B」が53.1%と拮抗した。さらに、A、Bともに、「ア、わかって」「イ、理解できて」の表現に言い換えられるかを尋ねたところ、「ア、イ」とともに言い換えられるという回答が35%で最も多かったが、「ア、イ」とはニュアンスが異なるため、言い換えられないとの回答も23%あった。そのほか、「ア、わかって」のみ言い換えられる、「イ、理解できて」のみ言い換えられるとの回答も見られ、「わかる」と「理解できる」の語にもニュアンスの差があることが明らかとなった。ここでは、「知れる」と「知ることができる」を同意として扱ったが、今後はその違いにも留意すべきであろう。

最後に「5」で「知れる」の意味が異なる例文を6つ挙げ、違和感のない用例を複数回答で選択させたところ、「お里が知れる」など慣用句的な用法に対して、70%が「違和感」を持つことがわかった。これは、「お里が知れる」の語の認知度によるのであろう。

以上のことから、学生は可能動詞「知れる」の表現を「話し言葉」的と感じ、「知ることができる」に対して「くだけた」表現との認識を持っていること、関わる「人」や「場」で両者を使い分けているが、「知れる」の語は身近であり、日常的によく使用していることが窺えた。ただし、これは「アンケート」として意識した上での回答であり、「成果欄」を見る限り、この使い分けの意識が明確かどうかは疑問が残る。日常に「知れる」を使用する機会が増加するにつれて、その意識は薄れているのではないか。また、本来（自動詞）の意味が、使われにくくなっていることも窺えた。

### 3.4 可能動詞「知れる」の扱い方

それでは、可能動詞「知れる」はどのように扱うべきか。ここでは、「知れる」の扱い方を考察する。「知れる」の語にかかわらず、「可能動詞」に対しては、その成立、自動詞と「可能動詞」の区別、「ら抜き言葉」との関わりから、多くの先行研究があり、諸説ある。また、日本語教育の観点からの先行研究も多いが、ここでは現在の扱

われ方を確認するのみとしたい。「知れる」に関して宮武(2022)は、自動詞の可能用法と可能動詞の区別を考察し、「知れる」の使用についてコーパスを用い、近世以前から現代までの例を歴史的な推移とともに検証している。そして可能動詞「知れる」は、「明治大正以前、さらに現代でも一般の文献中に確例を見出すことは難しく、話し言葉で「知れてよかった」のような文脈に現れるケースが少しずつ出てきている」状況と結論づける。浅川(2021)は、可能動詞と本来の下一段活用の動詞が同形で混同が生じやすい例として「知る」の可能動詞「知れる」と元からある自動詞「知れる」を挙げる。そして、例文で挙げた文章の一つは、明らかに可能動詞としての使用であると指摘している。

これらは自動詞と可能動詞の判別が文法的にも困難であることを示唆し、可能動詞「知れる」がやはり新しい使用法で定着していないことを示している。

さらに田中(2019)は、ニュース情報番組で、「～を知れてよかった」というインタビューに、字幕は「知ることができて」と付けたことを記している。

以上のことから、可能動詞「知れる」の使用例は増加しているが、十分に容認されているわけではなく、注意を要する表現であることが窺える。

## 4. 「学修成果欄」をめぐる文章指導

### 4.1 授業での指導

以上のことから、この可能動詞「知れる」の語が「成果欄」にある場合には、指導対象としている。担当当初は、半期に1、2回、この語が見られる程度であった。しかし、近年は毎回と言ってよいほどこの語が散見する。そのため、複数例あった場合や増加傾向にある場合には個別にではなく、課題返却時のフィードバックの一環として、全体に次の4点=1. 「知れる」の文法的な説明、2. 「知れる」は自動詞と可能動詞が同形だが、記述例は可能動詞としての使用であること、3. 可能動詞としての使用は最近のことで、違和感を持つ人が一定数以上いる表現であること(個々の語感による差が大きいこと)、4. 文法的に間違っているとは言えない語であるが、使用する場合は、1~3までのことを理解した上で使うことを伝えている。また、宣伝文など、違和感を用いて注目させる表現として使用している場合があることも伝え、場に応じて使用するよう指導している。

### 4.2 「学修成果欄」の活用の拡充の提案

「成果欄」の目的は、学生に学修現状を客観的に捉えさせることである。学生自身が「そのとき」の気づきを記すことは、授業を振り返る契機となり、それを後から読み返せばその「気づき」に対する変化を認識できる。教員側は、「成果欄」の内容を精査し、「フィードバック」

をすることで授業に還元し、自らの授業を振り返る契機とする。これが、「成果欄」の基本的な活用法であろう。

これに加えて、「成果欄」の内容だけでなく、今回のような語感の例、文法上、明らかに不適切とは言えない表現を背景までふまえて拾い上げ、指導していくものとして活用したい。表記の明らかな誤り(「づ」「ず」など)は、当然指導対象であるが、それはSNSや若者の文化と関わっていることもある。そのような背景の把握も「成果欄」が一端となるのではないか。「日本語表現1」、「同2」の授業の中では取り上げられない事柄の指導として、課題とは異なり、比較的自由に記すことができる「成果欄」を活用することを提案したい。

## 注

- 1 宮武(2022)も『日国大』を引用し、見解を述べる。また、論の発端として学生の提出物を挙げている。
- 2 アンケートに関しては、結果を公表(研究発表・論文等)する機会があることの承諾をとった上で実施した。

## 参考文献

- (1) 日本国語大辞典第2版編集委員会・小学館国語辞典編集部編(2001)『日本国語大辞典 第2版』小学館, Vol. 7, p. 487.
- (2) (1)に同じ。Vol. 3, p. 901.
- (3) 塩田雄大(2012)「最近気になる放送用語「知れて?」「知ることができて?」NHK放送文化研究所 <https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/kotoba/term/153.html/> (2024-01-11).
- (4) 神永暁(2017)「日本語、どうでしょう?—知れば楽しくなることばのお話—第362回「知れる」は「知ることができて」という意味か?」ジャパナレッジ・知識の泉 <https://japanknowledge.com/articles/blognihongo/entry.html?entryid=380/> (2024-01-11).
- (5) 毎日新聞校閲センター(2018)「「知る」の可能形「知れる」もあり?」毎日ことばplus <https://salon.mainichi-kotoba.jp/archives/20766/> (2024-01-11).
- (6) 宮武利江(2022)「「知れてよかった」の違和感を探る—自動詞「知れる」と可能動詞「知れる」存疑—」『文教大学国文』Vol. 51, pp. 21-31.
- (7) 浅川哲也(2021)「ら抜き言葉と日本語教育」『言語の研究』(東京都立大学言語研究会) No. 8, pp. 1-18.
- (8) 田中伊式(2019)「ことば・言葉・コトバ 知れてよかった」『放送研究と調査』(NHK放送文化研究所) Vol. 69, No. 6, p. 83.